

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）個人研究2025年度研究成果報告書

研究代表者	所属部局・職名	氏名		
	文学部史学科 教授	佐藤雄基		
研究課題	文書実践論による中近世東アジア比較史―日越比較を中心にして―			
研究期間	2025 年度			
研究経費 (1 円単位)	(支出金額) 1,000,000 円 / (採択金額) 1,000,000 円			
研究の概要 (200～300 字で記入、図・グラフは使用しないこと。)				
当該研究の研究目的を含むこと。 【以下、報告書全体について】他の研究分野の委員が評価することも想定し、わかりやすく記載すること。				
現代歴史学では比較史やグローバルヒストリーが大きな潮流となっている。どちらも従来の「一国史」を相対化し、現代のグローバリゼーションに対応した新しい歴史学のあり方を模索した動きである。しかし、歴史研究の基礎は史料読解であり、どのような性格の史料が、どのような形態で利用可能であるのか、史料の「残り方」はその歴史の実態とは別に国・地域によって多様である。世界各地の史料形態の比較検討が、比較史やグローバルヒストリーの前提として必要である。 伝統的な古文書学の体系論が、上位権力によって作成された文書を基準にしてきた影響は根深く、東アジア諸国の政治体制の差異と断絶が強調されてきた。一見して差異が激しいために、中近世史料の比較研究は従来十分に行われてこなかった。本研究では、文書作成の作法や地域社会における文書様式と機能の展開を跡づけ、伝統的な古文書学を相対化に努めてきた日本の中世文書論の方法論を敷衍することで打開を試みる。原本調査の知見に基づく文書実践のありかたの解明という課題を設定し、本年度は中国「周辺国」としての共通点と相違点をもつベトナムと日本との比較を中心にして、古文書に関する日・中・朝・越の研究状況を調査するとともに、国内外の研究者とのネットワークを構築し、比較研究に必要な用語・概念・論点を共有することを目指す。				

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)
[東アジア比較史] [史料論] [中世]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

以下の視点を含めて記載のこと。

- ・当該研究は何をどこまで明らかにできたのか (できなかったのか)。
- ・何をもって研究成果 (経過) を達成できた (できなかった) と考えられるのか
自身が設定した研究目的・目標に照らして、その根拠がわかるよう記載のこと。
- ・どのような点において、当該研究分野の学術研究推進の高度化に寄与できたのか。

本研究の目的は、日本・中国・韓国・ベトナムにおいて行われている古文書学に関する研究状況を調査するとともに、国内外の研究者とのネットワークを構築し、比較研究に必要な用語・概念・論点を共有することにある。本研究は、原本調査に基づく文書実践という次元での新しい比較史の方法を提起したい。文書実践論とは、文書発給者である公権力の視点に立った伝統的な古文書学を批判し、文書が実際の人間関係 (コミュニケーション) のなかで形づくられたものであるという側面を再評価し、文書をめぐる人びとの実践を総合的に論じる視点である。この文書実践論の東アジア比較史料論への適用可能性を探ることが本研究の目的となる。

残念ながら、個人的な事情によって、当初予定していたベトナムでの調査を実施することができなかったが、九州国立博物館をはじめ国内での文書調査を実施した。また、日本国内では、従来より申請者が進めてきた原本調査を踏まえた幾つかの研究成果を発表した。日本中世の成果が中心となるが、今後の実践論的な比較研究に向けて、確かな基礎作業を進めることができたと考える。

以下、具体的な成果を述べると、論文「鎌倉幕府法の実践と地域社会」では、地下文書と呼ばれるような地域社会の内部の文書を分析することを通じて、鎌倉幕府法がどのように使われていたのか、法実践の重層性について事例を提示するとともに、問題提起を行った。また、英語圏における東アジア比較史学史の基本テキストとなる *The Routledge Companion to East Asian Historiography* 所収の章 (National Histories and Historical Practices in Premodern Japan) では、前近代日本における歴史実践という観点から、古文書を含めた史料となるテキストがどのような歴史意識・実践のもとで生成したのかを論じた。これらの仕事によって、日本中世における法史料・歴史史料の特質やその社会的機能が明らかになったと考える。

また、東アジア比較の前提として、日本史の通史記述のありかたが一国史的で、世界史をみると東アジアは中国を中心とした記述となり、隣国となる韓国やベトナムとの関係が見えにくいという問題がある。そうした点を念頭において、2026年6月刊行予定の共編著『〈日本史〉教科書を世界史から読みなおす』では、13世紀後半のモンゴル帝国の侵攻への対応という観点から、鎌倉時代の日本と現在のベトナムに存在していた大越国との比較を試みた。また、教科書記述を検討した仕事として、共編著『日本史を宗教で読みなおす』(山川出版社) を刊行したほか、2026年3月にはシンポジウム「史料を探究するー「探究」時代の日本史・世界史教育を求めて」を開催し、史料論的研究の成果を広く発信した。

文書論・史料論に関する研究を進めるとともに、東アジア諸国での歴史研究の基礎となる「史料の残り方」の国ごとの異同に関する相互理解を深めることで、当該分野の研究の高度化に寄与したと考える。

研究成果の概要 (つづき)

※この(様式2)に記入の、成果の公開を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

- ・佐藤雄基、「鎌倉幕府法の実践と地域社会」、『歴史評論』903、2025年、41-52頁

②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

- ・大西信行・佐藤雄基編 (大西信行, 佐藤雄基, 山田康弘, 吉田一彦, 平雅行, 岡美穂子, 上野大輔, 平山昇, 加藤喜之, 長谷川修一, 藤原聖子, 奈須恵子, 川島啓一), 山川出版社, 『日本史を宗教で読みなおす』, 2025年、221頁
 - ・小澤実・佐藤雄基編 (小澤実, 佐藤雄基, 松沢裕作, 奈須恵子, 佐藤公美, 金澤周作, 神野潔, 藤波伸嘉, 吉沢誠一郎, 黒田祐我), 東京大学出版会, 『グローバルヒストリーのなかの近代歴史学：歴史を捉え、書き、編む』, 2025年、356頁
 - ・春田直紀編, 勉誠社, 『中世地下文書論の方法と実践』, 2025年、460頁 (分担執筆「在地と地下のあいだ」119～141頁)
 - ・Q. Edward, Wang ed., Routledge, *The Routledge Companion to East Asian Historiography*, 2025, pp.506. (Sato Yuki, “National Histories and Historical Practices in Premodern Japan,” 123-141)
 - ・大西信行・佐藤雄基編, 山川出版社, 『〈日本史〉教科書を世界史から読みなおす』, 2026年 (刊行予定)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ・シンポジウム「史料を探究するー「探究」時代の日本史・世界史教育を求めて」、2026年3月21日、於立教大学池袋キャンパス